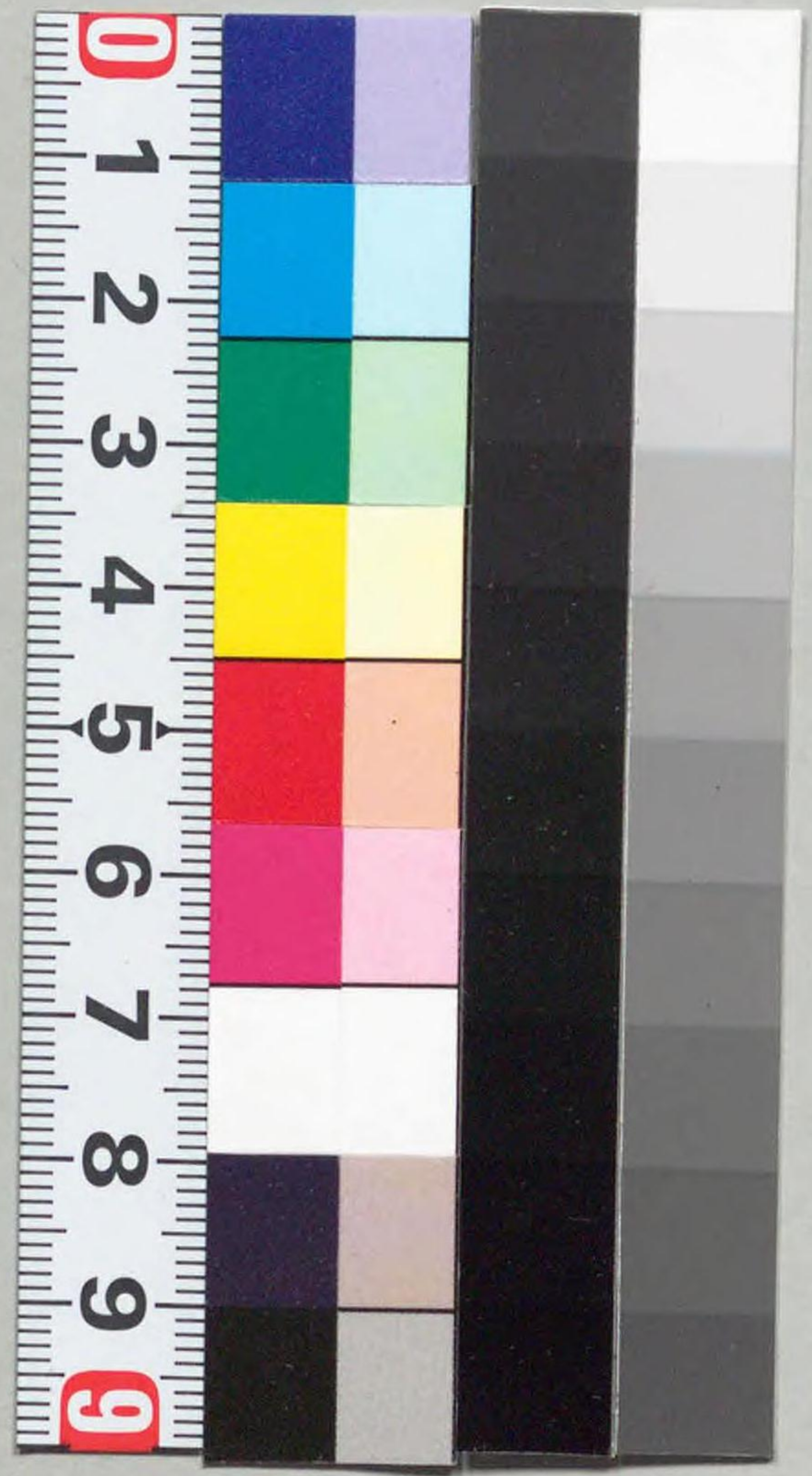


ひらがな童話集

水谷まさる 著



児
M



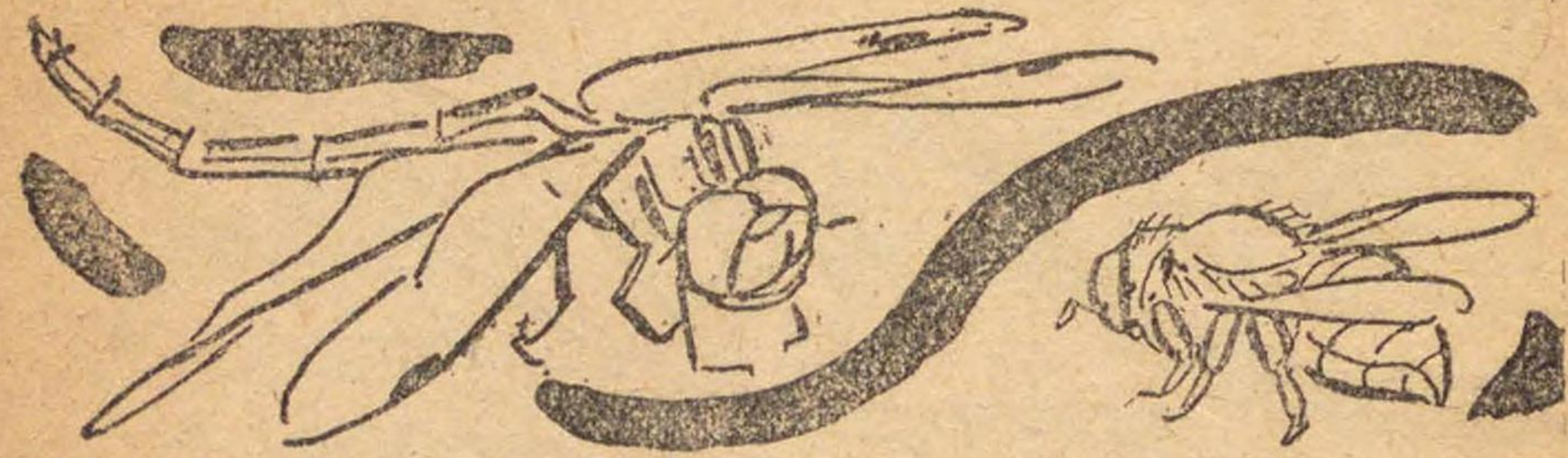


ひらがな童話集

水谷まさる著



48
M-53



目次

波のおくりもの	六
一ばんいいのりもの	三
花ばたけ	〇
アメリカのおきやくさま	元
やさしい手	五
ふるいとけい	四
三日月さまのおふね	三

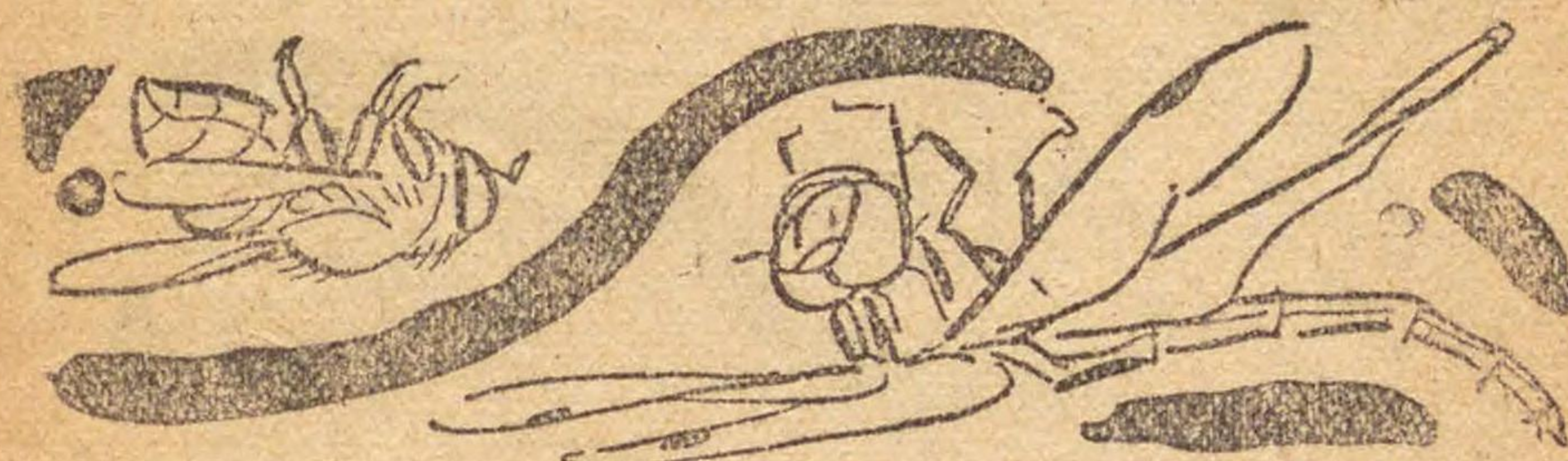


813618

ひらがな童話集



水谷まさる著



あ	と	が	き	おと	おき	ちい	たれ	名な	かか
.....
二六	二七	二八	二九	三〇	三一	三二	三三	三四	三五

装帧・挿画 立野道正



波のおくりもの

波が ザンブリ ザザザと おとを たてながら はまへよ
せませす。

ひろしさんは なつやすみに になると、まい年 おぼさんの
うちへ いきませんが、朝 目が さめると 波の おとが きこ
えるので、すぐに とびおきます。そして ねまきを きかえる
と はだしのままで 海へ いきます。波が おいでよ おいで
よと ひろしさんを よぶから です。



ひろしさんは 波が すき
です。波は おにごっこを
して あそんで くれ
ます。きれいな かい
がらを もって きて
くれます。たき木に
なる 木ぎれも はこ
んで きて くれます。
ひろしさんは かいが
らと たき木を ひろ





います。

なつやすみの あいだに きれいな かいがらが たくさん
たまりました。かいがらは 海の よい おみやげに なり、町
へ かえって から お友だちに あげて、よろこんで もらう
ことが できました。まだ たき木は おばさんに あげて よ
ろこんで もらう ことが できました。

けれど ひろしさんは 波から もっと すばらしい ものを
もらいました。それは なんでしょう？

ザンブリ ザザザと うちよせる 波の おと です。まい日

きいて いる うちに、波の おとは すばらしい うたと な
って、ひろしさんの みみの おくに のこったの です。けれ
ど ひろしさんは そんな こととは きが つかずに 二十年
の ながい 月日が たちました。

ひろしさんは 中がくこう から おんがくがくこうへ いき
おんがくの べんきようを して りっぱな おんがくかにな
って いました。ひろしさんは ピアノを ひく ことも じよ
うず でしたが、ピアノの きよくを つくる ことは もっと
しようず でした。

ひろしさんの ちくった ピアノの きよくの なかで、海の





うたと ぼうのが ありました。それは ほんとに すばらしい
きよくて、それを きくと、かなしんで いる 人は かなしみ
を わすれ、くるしんで いる 人は くるしみを わすれ、あ
たたかく やさしく なぐさめられる ような きが しました。
「すばらしい きよくだ。」

たれも かれも ほめない人は ありません。

「どうして こんな りっぱな きよくが できたの ですか？」
と しんぶんきしゃが あるとき ひろしさんに たずねまし
た。

「子どもの とき まい年 なつやすみに 海へ 行って 波と

あそんだ せい でしょう。あの 波の うたが みみに のこ
って いて、わたしに 海の きよくを つくらせたの でしょ
う。」

ひろしさんは そう 行って あおい 海と、はまへ よせる
しろい 波とを おもいうかべました。





一ばんいいのりもの

「のりもの なかで なにが 一ばん いいか？」

ある日 子どもたちが かきねに もたれて はなしあいました。

まっさきに くちを きたた のは ペギイでした。

「ぼくは じてん車が 一ばん いい。じてん車は かるくて はやくて ちようど ぼくに にあう。」

アーノルドが その つぎに いました。

「じてん車 なんか おもしろく ないや。ぼくは くら馬が いい。大きな くら馬、パカパカと のはらを はしるんだ。ゆかいだな。」

すると ハムフライが いました。

「ぼくは じてん車も くら馬も いやだ。ぼくは じどう車がいい すてきだな じどう車は。」

そう いった ハムフライは じどう車を うんてん する 手つきを して、ブウブウと いました。

こんどは ジャッキイが いました。

「ぼくは りくの のりものは おもしろくないな。モーターボ



トトだ。水のうえを 白い 波を たてて ぐんぐん はしる
んだ。すばらしいな。」

つづいて ウルストラが いました。

「ぼくは ひこうきだ。だんぜん ひこうきだ。ブウンブウンと
空を とぶんだ。どんな とおくても すぐに いってしまらん
だ。」

六人のうちで たった ひとり にこここ わらって だまっ
て いたのは トミイでした。

「トミイ、きみは なにか いいの？」

と ジャッキイが たずねました。



けれど トミイは やはり

わらって いました。

「なにか いいのか

いって ごらんよ。」

と ハムフライが

いました。

トミイは やはり わ

らって います。

「まいまいつぶろ か

い？」





とウルスラが ふざけて いったので、みんな どっと わらいました。

わらいが おさまると、トミイが いいました。

「よし それじゃ いうよ。じてん車は はやく はしらせるとよく ひっくりかえる。あぶないよ。大きな くる馬は のって いる 人を ふりおとす ことも ある。じどう車は やかましい。モーターボートは しずむ ことも ある。ひこうきは おちる ことも ある。だが ぼくの すきな のりものは そんなのと ちがう。あんぜんで やさしくて やわらかくて しんせつな のりものだ。」

「へえ。」

みんなは ふしぎそうな かおを しました。

「なんだろう？ そんな のりもの あるかしら？」

「あるよ。みんなも のった ことが ある。」

トミイは くすつと わらって かたを すくめました。

「なんだろう？ なんだろう？」

みんなは かんがえました。けれど かんがえ つきません。

「それでは おしえて あげよう。それは おかあさんの おひざさ。」

トミイは はっきりと いいました。





それを きいて みんなは なるほどと おもいました。おか
あさんの ひざに のって ゆすって もらうのは、たしかに
たれが かんがえても 一ばん たのしい、一ばん いい のり
ものに ちがいありません。

けれど、この六人は 大きく なりすぎました。

「おかあさん おひさに のせて。」

と いえば おかあさんは わらって

「なんです、そんな 大きな なりを して。」

と いわれるでしょう。

みんなは おかあさんの おひさに のって、だかれた たの



しい むかしを おもいだしました。そうして ゆめでも 見
て いるような 目を しながら あかい ゆらやけの 空を
ながめました。



花ばたけ

あたたかい 春の 日ひよう日 です。

てつをは 朝 はやく おこされました。

「さあ おひっこし ですよ。」

おかあさんの こえて、てつをは すぐに とびおきました。

あたりを 見まわして 目を パチパチ させました。ゆうべ

しらないうちに にもつが かたづけられて、じぶんの ねて

いた へやにも、こうりや／かばんが いっぱい つんで あっ

た から です。

朝ごはんを

たべる

と、て

つをは ねえさん

と いっしょに

さきへ でかけま

した。こんど こして

いく 家を そうじ する ため

でした。てつをは ばけつを さげ、ねえ





さんは ぼろきと はたきを もちました。

でん車に のって 五つ さきの てい車ばで おりました。
てい車ばの まわり には ごたごたと 家が たって いまし
たが、すこし あるいて いくと、はたけ ばかりで、むぎが
あをく きれいに のびて いました。しばらく はたけ道を
とおって いくと、あいさい 川が ながれて いて、いたの
はしが かかって いました。その はしを わたる とき、川
を のぞいて 見たら、きれいな 水が ちよろちよろ ながれ
て いました。きつと 目だかが いるかも しれません。

「目だかを とりたいな。」

てつをが いうと、ねえさんは

「きょうは だめよ。」

と さつさと いそいで あるいて いきました。

まもなく 林が ありました。こんどの 家は その 林の
なかに ありました。なんの 小鳥か、あかるい こえて ない
て いました。戸を あけて 家へ はいって みると、てつを
が おもって いた よりも、ずっと よい 家 でした。日あ
たりも よく 風とおしも よい 家 でした。

「ぼく 氣に いっちゃった。」

てつをは 家の なかを あちこち あるき まわりました。



「だけど よるは こわいかも しれないわ。」

と ねえさんが いいました。

「こわい ものか。へいきだ。」

と てつをは かたを そびやかして いいました。

ねえさんは そうじを はじめました。はたきを かけ、ほうきで はきました。けれど、こして いった 人たちが ちゃんと よく そうじ して おいて くれたので、そうじは らくでした。

「いい 人たち だったのね。」

と ねえさんは かんしん しました。



その あいだに てつをは 家の なかを あちこち あるきましたが、子どもべやに くと、かべに かみが はって ありました。その かみには

「こんど こして いらっしやる かたに たのみます。おにわの すみの 花ばたけを かわいがって ください。わたしが つくったのです。かず子。」

と かいて ありました。

てつをは とおい 北の 國へ こして いった その 女の子の ことを かんがえました。きっと その 子は やさしい おとなしい 子に ちがい ありません。二年生 でしょうか。



三年生 てしようか。なかなか じも じようず てした。
てつをは さっそく におに てて みました。ひだりの ぼ
うに 花ばたけが できて いました。それは きれいな 石で
かこいが して ありました。花ばたけの 土は ころく ぼつ
かりと して いて、いろんな 花の めが あおく ぼつぼつ
でて いました。そして、ところどころに ちいさな 木の ふ
たが たてて あり、いちいち 花の 名まえが かいて あり
ました。

「ははあ 朝がおも ある。百日草ひゃくじちそうもある。コスモスもある。」
てつをは 花の 名まえを よんで そう いました。

たしかに よく かわいがった 花ばたけ です。草などは
すっかり とって ありました。かず子さんは 水を やったり、
こやしを やったり した てしよう。きつと 花の めは
すくすくと のびて、やがて きれいな 花を さかせる てし
よう。

「だけど かず子さんは かわいそうだな。花が さいても も
う 見る ことが できない。どんなに 見たいだろう。」
てつをは、北の 國で、花ばたけの 花の ことを かんがえ
ている かず子さんに、花が さいたら おし花に して お
くって あげようと おもいました。





「そうだ、そうだ、それがいい。もしおし花にできない
花があったら、ぼくしやせいしておくってあげよう。」
てつをは そう ころをきめました。
てつをは こんどのこの家にこの花ばたけがあったの
で、なおいっそすきにになりました。

アメリカのおきやくさま

「はるを、はるを、おきなさい。はやく、はやく。」
と、おかあさんが、よびました。はるをは目をあけました
が、ねむくてたまりません。しぶしぶ目をこすりながら、
「おかあさん、もう朝？」
と いました。
「いいえ、まだ九じです。」
「それではねたばかりですわね。」



「ええ、そらよ。だけど、はやくおきて、ちようだい。おとうさまが、アメリカのおきやくさまをつれて、いらしたのですよ。」

「ほんと？」

はるをは、アメリカのおきやくさまと、きいて、とびおきました。そのあわてたようすを見て、おかあさんは、わらいながら、いいました。

「さあ、はやく、ねまきを、きかえて、ごあいさつ、するのです。はるを、えいごが、やくに、たつ、かしら？」

はるをは、むねを、わくわくさせながら、ねまきを、きかえ、

おざしきの、つぎの、へやへ、いきましたが、おとうさんと、おきやくさまの、えいごが、べらべら、きこえて、くるので、あしが、すくみました。なんだか、はいて、いくのが、はずかしいからでした。

そこへ、おかあさんが、おぼんに、こうちやを、入れた、おちやわんを、二つ、のせて、はこんで、きました。

「どうしたの。さあ、いらっしやい。」

おかあさんが、からかみを、あげました。はるをも、おもいきって、あと、から、はいて、いきました。

アメリカのおきやくさまは、しんぶんには、たらいで、いる



かたで、日本に だいぶ ながく いるので ざぶとんの うえ
にあぐらを かいて すわって いました。はるをに きが
つくと にこにこ わらいました。はるをは えいごで あいさ
つ しようとおもいましたが こえが できません。ただ わら
って おじぎを しました。

おとうさんが はるをの ことを なにか おはなし しまし
た。きっと 二年生で いたずらぼうずで このごろ しきりに
えいごの べんきようを して、アメリカの おきやくさまが
きたら、えいごで はなすのだと います……と いうよう
な ことを はなして いるのに ちがいありません。だって

おきやくさまは おとうさんの はなしを きいて、わらいなが
ら はるをの ほうを 見て いた から です。はるをは な
んだか はずかしくて たまらな
くなり、

「グット ナイト」

と いきなり 行って

おじぎを して おざしき

から とびだしました。そして、

おへやへ きて ふとんの

なかに もぐって しまいました。





グット・ナイトと いうのは おやすみなさいと いう こと
です。

朝 ですよ。はるをが おきて いくと、おとうさんが わらい
ながら いました。

「はるをは ゆうべは ください だったね、せっかく アメリ
カのおきやくさまが いらしたから わざわざ おこして あ
げたのに。」

はるをは すっかり よわって しまつて、

「こんど から もう だいじようぶ です。」

と いました。

「ゆうべは ください だった けれど、こんな ごほうびを
いただいたよ。」

おとうさんは そう いて かみづつみ を くださいまし
た。はるをが あけて みると、それは アメリカの きれいな
え本で ありました。

「ああ うれしい、サンキユウ サンキユウ。」

はるをの うれしそうな かおを 見て、

「その かおを アメリカの おきやくさまに 見せて あげた
いな。」

と いて わらいました。



やさしい手

その 女の 子は ルイズと いました。ふさふさした 金
いろの かみの けの 目の大きな 子 でした。

ルイズは 山の なかの そまつな 山小屋に おとうさんと
おかあさんと 三人で くらして いました。村へは とおいし
たれも あそびに くる ものも ありません でしたが、ルイ
ズは ちっとも さびしいと おもった ことは ありません
でした。

おとうさんは かりうどで 山に はいって 鳥や けものを
うち、それを 村の やど屋へ うりに いきました。そして
かえりに いろんな ものを かって きました。おかあさんは
山小屋の まわりに はたけを こしらえ 一年じゆう たべる
やさいを それから それへ つくりました。三人の ぐらしは
これと いて ふじゆうは ありません でした。

ふじゆうと いえば ルイズの がっこう です。ルイズは
九つ でした から、二年生の わけ ですが、こんな とおく
からは とても かよえない ので、がっこうで つから 本を
おかあさんが おしえました。ルイズは なかなか あたまが





よくて、ただしく はっきりと おぼえ、四年生 ぐらいの ち
 からを もって いました。

四年生 ぐらいの ちからと いえば、ルイズの からだも
 四年生 ぐらいで ありました。まい日 おかあさんを たすけ
 て よく はたらきました。だいどころの ようじ、せんたく
 たきぎとり なんでも じょうず でした。谷川たにかわで さかなを
 とって くる のも ルイズの やく目 でした。

けれど、ルイズの はたらきの なかで、一ばん じょうずな
 はたらきは なんぞ しよう？ それは 山いちごを つむこ
 と でした。さがす ことも じょうず でしたし、はやく つ

む ことも じょうず でした。しかも ていねいに つんで、
 ちようど たべごろの 山いちご ばかりを
 つみました。



ルイズの

つんだ 山いちごは ルビ



イの ように あかく きれいでした。きずの ある のは も
ちろん ありません。じゆくさない のも ありません。じゆく
しすぎた のも ありません。ちやんと よく そろって いま
した。

おとうさんは この 山いちごを 村の やど屋へ うりに
いきます。やど屋では たいへん よい ねだんで かって く
れました。やど屋の おかみさんは この 山いちごを おきや
くさんに だす とき、いつでも じまん しました。

「これは 山の 女の 子が つんだ 山いちご です。この
女の 子は たれ よりも はやく、たれ よりも ていねいに

ちようど たべごろの 山いちご ばかり よりわけて つむ
のですよ。まあ たべて ごらんなさい。とても おいしいで
すよ。」

おきやくさんは みんな よろこんで たべました。
あるとき かりに きた 王さまが、この やど屋で 山いち
ごを たべて、山いちごを つんだ 女の 子の きもちにか
んしん しました。

「そういう やさしい しんせつな よく きの つく ところ
をもった 女の 子の 手は、きつと びよう人を よく か
んど するに ちがいない。わしの 王子は もう ながい こ





と びようきで ねて いるが、その 女の 子に かんご し
て もらったら、ずんずん よく なるかも しれない。」

ルイズは 王さまに のぞまれて、王子の びようきを かん
ごする ために、王さまと いっしよに ごてんへ いきました。
さっそく ルイズは 王子の かんごを しました。なるほど
ルイズの かんごは まことに しんせつで よく ゆきとどき
そのため 王子の びようきは おいしゃも おどろくほど ず
んずん よく になりました。

王さまの およろこびは どんな だったでしょう。

「やっぱり わたしの おもった とおり だった。こころの こ

もった あの しんせつな よく はたらく 手で、ゆきとどい
た かんごを すれば、どんな びようきも なおって、しまう。」

王さまは 王子の びようきが なおると、おいわいの かい
を ひらき、たくさんの やく人や けらいを よびました。お
いしゃと、いっしよに ルイズも よい せきに つき、めずら
しい ごちそうを たべました。

かいの あとで 王さまは ルイズを ほめて、たくさんの
ごほうびを やりました。ルイズは はずかしそうに あかい
かおを して、うつむいて いました。そして そのやさしい
手は、きちんと ひざの うえに おかれて いました。



ふるい とけい

正一のおとうさんは 大きな あうみの ある ニッケルの
さげどけいを もって います。その とけいは 見た だけで
ふるい ものだと いうことが わかるほど、むかしふうで あ
りました。その かわり いまどきの ものと ちがって、どっ
しりと して いて なんとなく たのもしく おもわれました。
ある日 正一は おとうさんに たずねました。

「どうして そんな ふるくさい とけいを さげて いるのて

すか？ くるわない から ですか？」

「そうだ、じつに せ

いかくだ。くるった

こと なんか 一ども

ない。」

「では とけい屋

の ごやっかいに

なったことは ないの

ですか？」

「うん、一年に 一ど そうじ して





あぶらを さして もらう だけだ。」

「ほう、ずいぶん いい とけい なのですね。おとうさんが
わかい ときに、おかいになつたの ですか？」

「ちがう、わたしの おとうさん、つまり おまえの おじいさ
ん から いただいたのだ。おじいさんは がい國へ いらした
とき、スイスで かって、わたしが 大がくを そつぎよう し
たとき、おいわいに くだすつたのだ。そのとき おじいさんは
この とけいは ふるいが ちっとも くるわないと おっしゃっ
た。」

おとうさんは そう 言って、いまは もう この 世に い

ない おじいさんの ことを なつかしそりに おもいだし
いました。

「それでは この とけいは おじいさんが かつた とき か
ら、ちっとも くるわらないの ですね。」

正は びっくりした まるい 目で、おとうさんの 手の
なかの とけいを ながめました。

「そうだ、かれこれ 六十年、せいかくに うごいて きたのだ。」
「えらい もの ですね、この とけいをつくつた 人は ど
んな 人 でしょう。スイスの しよくこうさん ですね。その
人は ていねいな しごとを した もの ですね。」





「そらだ、どうか この とけいが いつまでも くるわないで
おやくに たつ ようにと、そら おもって ていねいな しごと
とを したのに ちがいない。」

「正一は この とけいを つくった 人にあつて、この とけ
いが 一ども くるわずに せいかくに うごいて いる こと
を しらせて あげたら、どんなに よろこぶだろうと おもい
ました。けれど たぶん その人は スイスの しずかな おは
かの なかに ねむって いる でしょう。」

おとろさんは、いいました。

「それに もう ひとつ おとろさんが この とけいの すき

な わけが あるのだよ。それはね、この とけいの おとだよ。」

おとろさんは 正一の みみに とけいを あてました。

「なんと 行って いるかね？」

正一は 目を つぶって ききました。

「カツチカチ カツチカチ……」

「そうかな、おとろさんには シツカリヤレ シツカリヤレと
行って いる ように きこえるがね。」

「あ、そらだ、行って います、行って います。」

おとろさんは にっこり わらって いいました。

「ね、たしかに 行って いるだろう。おとろさんは この お





とを きいて、なんども はげまされ、げんきづけられた。くる
しい とき、かなしい とき、こまった とき、がっかり した
とき、シツカリヤレ シツカリヤレと 言って くれた。」
正一は おとうさんが この とけいを だいじに してい
る わけが よく わかりました。

「おまえが 大がくを そつぎよう したら、おとうさんは こ
のとけいを おいわいに あげようと おもうが、かたが ふる
いから、ほしくは ないだろう。」

正一は あわてて、

「いいえ、いいえ。」

と、いって、それから ちから づよく、

「ぜひ ください。ぼくは よろこんで さげます。おぢいさん
おとうさん、それから、ぼくが せわに なるのですね。」

と、いって、うれしそうな かおを しました。





三日月さまのおふね

つとむさんは おねえさんの ご本の なかで きれいな え
を 見ました。それは しろい ふわりと した ねまきを き
た せiyōの かわいい あかちやんが、金いろの ほそい
三日月さまに のって、お空に うかんで いる え でした。
「やあ すてき だな。」
つとむさんは にこにこ わらいながら じっと いつまでも
その えを 見て いました。

三日月さまは まるで おふね みたいに お空を すすんで
いきます。ずんずん 雲が ながれます。その 雲を わけて
お星さまを じゆんじゆんに たずねて いったら、どんなに
おもしろい でしょう。

「ほくも 三日月さまの おふねに のって みたいな。」
つとむさんは その せiyōの あかちやんが うすももい
ろの ほったに えくぼを うかべて、まあるい 目を くり
くり させて いる のを 見ると、きつと この あかちやん
は おもしろくて おもしろくて たまらない のだろうと お
もわれました。



その日 日が くれて お空に お星さまが できました。ふと
きが つくと やねの うえに 三日月さまが でて いました。

「あ、三日月さまが でて いる。」

つとむさんは なるほど おふねみたいだと おもいました。

けれど お空の 三日月さまに のる ことは できません。

「つまんないな。」

つとむさんは たれに いうともなく いいました。

けれど いい ぐあいには その よる、ゆめで 三日月さまの

おふねに のる ことが できました。

その ゆめは こういう ゆめ でした。

つとむさんが おうちの 玄関の まえに たって いると、

空から 三日月さまが おりて きました。三日月さまは ぴか

ぴか ひかって、まるで 金の おふねの ようでした。

「さあ おのんなさい。」

三日月さまの おふねの なか から、そう いう こえが

しました。つとむさんは すぐに あしを かけて おふねに

のりました。けれど おふねの なかには たれも いません。

つとむさんは どうすれば このおふねを お空へ のぼらせる

のか こまっていますと、すこし おふねが ゆれたと おも

うと、もう ふわりと お空へ のぼって いきました。雲の





ところまで のぼると、こんどは よこに すいすいと すす
みました。ああ、なんという よい きもち でしょう。

「おかあさんも いっしよに おのりに なれば よかったな。」
つとむさんは ゆめの なかで そう おもいながら、すぐ
そばで きらきら ひかっている お星さまに さわって み
ました。お星さまは あつくも つめたくも なく、ただ すべ
つこく おもわれました。

「やあ おもしろいな。」

つとむさんは ふねが すすむに つれて、手を だして じ
ゆんじゆんに お星さまに さわって いきました。

その うちに ただ お星

さまに さわって いる

だけでは つまらなく

なったので、ぐいと

ひっぱって、お星さ

まを おふねの な

かへ 入れました。

そばで 見ると お

星さまは ダイヤモンド

の ように ぴかぴか ひかっ





て まぶしい くらい てした。

「みんなの おみやげに お星さまを たくさん とろう。」
つとむさんは せつせと お星さまを とって おふねに つ
みこみました。

ところが あんまり たくさんの お星さまを つんだので、
おふねが おもくなり したへ したへと ぐんぐん おちて
いきます。けれど たかい ところ から おちるのに、すこし
も こわい きは しません。たちまち 三日月さまの おふね
は つとむさんの おうちの ご門の まえに つきました。つ
とむさんは おふね から とびおりました。

そのとき つとむさんは、

「あつ おみやげの お星さまを もって くるのを わすれた。」
と おもったので、すぐに おふねの なかを 見ました。け
れど どうしたわけか お星さまは かげも かたちも なく、
おふねの なかは からっぽ でした。

「つまらないの。せつかく たくさん とって きたのに。」
つとむさんは がっかり しました。すると その とき 目
が さめました。

朝の ごはんの とき、つとむさんは この ゆめの ことを
みんなに はなしました。みんなは おもしろい ゆめだとい



いました。つとむさんは わらって、

「おかあさんも いっしょに おのりに なれば よかった。」
と いました。

おかあさんは あたまを ふって、

「いや、です、いや、です。そんな たかい ところは こわくて、おかあさんは まっぴら ごめんです。」

と いました。

「いいえ、ちっとも こわくは ありません でした。とても

いい きもちでした。ぼくは もう 一ど 三日月さまの おふねに のって、お空の たびが したいな。」

つとむさんが そう いますと おかあさんは、

「おちると あぶない から、よっぽど きをつけて もらわないと。」

と、まじめに しんばい なさいました。

おとうさんも、にいさんも、ねえさんも、おかしがって、みんな わらって しまいました。





かかしさん ありがとう

いい おてんきが つづいて、どこの 田んぼの いねも す
っかり みのりました。

きいろい ひとつぶ ひとつぶの もみは はちきれそうに
ふとりました。その ふとった もみが ぎっしり つきました。
ですから いねは おもそうに あたまを たれました。

風が ふくと いねは さわさわと ゆれました。つきから
つきへ ゆれて いきます。まるで 金の 波なみが たつ ようで

す。

ああ なんて きれいでしよう。

よしちゃんとの 田んぼに 一本あしの かかしが たって
いました。ふちの やぶれた むぎわらぼうしを かぶって よ
しちゃんの おばあさんの ふるい つぎだらけの はんてんを
きて いました。

ぼうしの したには まるめた わらを、白い きれで つつ
んだ あたまが ありました。その かおには 目と はなと
目が かいて ありました。それは よしちゃんが ふとい ふ
てに たっぷり すみを ふくませて、



「おこった ような かおに しなくちや。」
と いいながら かいたのです。

なるほど 目は 大きく ぎょろりとして いるし、口は ぎ
ゆっと 一の じを ひいて、まるで おこって いる ように
見えました。けれど かかしは おこって なんか いません。

いま、この よくみのった 田んぼを 見わたしながら、
「ああ よかった よかった。これなら ほらさくだ。この ぶ
んなら まもなく かりいれだ。わしの やく目も じきすむ。」
と おもって いました。

かかしは うれしくて うれしくて たまりません でした。



風に ゆられて さわさわと たつ うつくしい 金の 波を
うっとりとながめて いました。すると そのうちに かかし
はこの 田んぼに たってから、きようまでの ことを いろ
いろと おもいだしました。

一ばん さきに おもいだしたのは まい日 まい日 雨あめが
つづいた ときのこと でした。

「あの ときの しんぱいと いったら 大へんな ものだった。
おひやくしようさんたちは みんな かなしそうな かおをし
て、いたっけ。」

まったく あの ときのこと、いま おもいだしても む



ねが いたく なる ようです。あけても くれても 雨 でし
た。びしょびしょと 雨ばかり。かかしは ずぶぬれでした。さ
むくて ふるえました。これでは いねが くさるだろうと お
もうと なきたく なりました。

「だけど すずめたちを にらみつけて おっぱらった ときは
まったく ゆかい だったなあ。」

かかしは その ことを おもいだして、

「はっ はっ はっ。」

と、わらって しまいました。

それは いたずら すずめが たくさん よって きて、ほを



つついた ときの ことでした。その なかの 一わが こっち
をむいた とき、ぐっと ちからを こめて にらんだの です。
そうしたら その すずめが こわがって ほかの すずめたち
に、

「おらい にげろ にげろ。」

と いったの です。それで みんな あわてて にげて し
まいました。にげるとき たがい に ぶつかり あって 田んぼ
へ おちたのも いました。

かかしが そんなことを おもいだして いると、むこうから



よしちゃんが、おとうとの さぶちゃんと いっしょに やって
きました。ふたりが おかあさん から いいつかって かかし
を とりに きたの です。

「あしたは かりいれ だから かかしを とって いらっしや
い。いまは ものを そまつに しては ならないから、あの
かかしも しまって おいて、また らい年 つかいましょう。」
おかあさんは そう 言って ふたりに かかしを とりに
よこしたの です。

よしちゃんは かかしの たって いる 田んぼへ くと、
いねを わけて 田んぼへ はいり、かかしの あしに りよう

手を かけて、

「どっこいしょ。」

と 言って ぬきました。それから
かかしを かついで あぜ道みちに たっ
て いる さぶちゃんの ところまで
きて ねかしました。

「やあ ずいぶん きたなく
なったな。」

と さぶちゃんが いいました。

「ながい あいだ たって いて、雨や





風にさらされたからだ。かかしもたいへんだったな。」
とよしちゃんがいました。

「にいちゃん かかしは えらいね。」

「うん えらいよ。かかしの おかげで うちの 田んぼには
すずめや からすが こなかった。」

「あたいより かかし えらいね。」

「うん にいさん より えらいよ。かかしは しんぼろ づよ
いよ。」

ふたりの はなしを きいた かかしは すっかり うれしく
なりました。ながい あいだの くろうが すうっと きえて

しまったような きが しました。

やがて よしちゃんと さぶちゃんは かかしを かついで
かえって きました。

よしちゃんは うたを うたいました。

ほら年じゃ まんさくじゃ

かかしさん ありがとう

よしちゃんは じょうずに うたが つくれたら かかしのく
ろうを うたい、かかしの しんぼろづよい ことを うたい、
かかしへの おれいを うたっただけしようが、よしちゃんは 一
年生で じぶんの おもって いる ことを うたうことがで





しまわれるのだらう、そうしたらねずみがでてきていろんなものをたべないようににらみつけてやろう。」
かかしはもっともっとみんなのおやくにたちたいとおもいました。



きません。しかたがないので、

ほう年じゃ、まんさくじゃ

かかしさん ありがとう

と なんども くりかえして うたいました。さぶちゃんも

それを まねて、いっしよに うたいました。

かかしは その うたを きいて うれしく なりました。と

ても いい うた です。かかしは ふたりに かつがれたまま

青く はれた 空を あおいて いい きもちに なって いま

した。

「そうだ らい年 また 田んぼへ たつまで きつと 小屋へ

名なしのいたずら男

みなさん！ あなたがたは へやを てるとき、ちゃんと ぴ
っしり しようじを しめた つもりなのに、どうした わけ
か すこし あいて いて、ちようど そこを おかあさんに
見つかって、

「ほら また しようじが あいて いますよ。ちゃんと よく
おしめなさい。」

と いわれた ことは ありませんか？



また おとうさんと いっ

しよに あそびにい

こう とし

て、よろこ

んで シャ

ツを き

かえて

いると、

ボタンが とれて その ボタ

ンが 見えなくなって さがして いる う





ちに、ずんずん じかんが たった ことは ありませんか。

「おい、おい はやく しろ。」

と おとうさんが いいます。

はやく さがそうと して あせれば なお ボタンは 見つかりません。それでも やっと さがして シャツに つけて もらったら 三十ぶんが むだに すぎて いました！

また あなたがたは げたを ちゃんと そろえて ぬいで おいたのに はこうと おもって きて みると かたほうの げたが、ひっくり かえって いた ことは ありませんか？

そのほか いろいろな ことが あるでしょう。たとえば よ



く 氣を つけて たべて いるのに、しらない うちに おわんの おつゆを こぼして、ふくを よごして いたり、おやつに もらった かき 三つの うち、一ばん おいしそうなのを 一ばん あとで たべたら それが とても ひどい しぶがきで、口が まがりそうだった というような ことが あったでしょう。

まだ まだ かぞえたてれば いくらも そういう ことが あったに ちがひ ありません。

たとえば いつも おれた ことの ない えんぴつが だいたい じな しけんの ときに ポツンと おれたり、おとうさんの



お友だちに 道で、あつて、せつかく ほうしを ぬいて おじ
ぎを すれば その 人は へい氣な かおを して 行って
しまつたり、あたらしい くつを かって もらつたので よく
氣を つけて はいて いるのに、石に けつまずいて、さきの
ほうを すりむいたり、そんな ことが きつと あつたてしよ
う。

わたしも 子どもの ときに、そういう めに たびたび あ
いました。そういう とき みなさんは かおを しかめて、
「ちえっ！ うんが わるいな！」
と おもつたに ちがい ありません。

ふみを にも そういう ことが たびたび ありました。ゆ
びを おつて かぞえて みると ざつと 四十ぺん ほど そ
んな うんの わるい めに であいました。

ところが きようと いう きようは ふみをも まつたく
よわつて しまいました。と いう のは、だいに つかつて
いる トランプの ハートの 女王じよおうが なくなつたのです。
この トランプは アメリカへ 行って いた おじさんのお
みやげで たいへん すばらしい ものでした から 一まい
でも なくさない ように、あそんだ あと では、きつとか





ずを かぞえて つくえの ひきだしに しまつて おきました。
それなのに、それなのに、こんや あそぼうと おもつて だし
たら、ハートの じよおう 女王が いないのです。

ふみをは もしか したら、ハートの 女王は さんぽに だ
かけたのかも しれないと おもいました。けれど そんなは
ずは ないと すぐに かんがえ なおしました。

「それなら いったい どうしたのだらう？」

ふみをは じつと かんがえました。けれど いなく なる
わけが ありません。みんなに たずねましたが、みんなも し
りません。そうかと いった ねずみが ひっぱつて いったとも

おもわれません。

「ちえっ！ うんが わ
るいな。」

ふみをは つぶや

きました。おなじ

なくなる なら、な

にか こまかい じが

かいて あつて、あそぶ

ときに いらぬい ふだが は

いつて います から、それが なく





なれば いいのにと おもいました。

そとは 雨あめです。秋の 雨が しとしと ふって います。

ふみをは どこかで ハートの 女王が 雨に ぬれて、なきそ
うな かおを して いるのでは ないかと おもって、ひどく
しんぱいに なりました。

ふみをは どこか おへやの なかに まぎれこんで いるに
ちがいないと おもいました。それで ほらほう さがして
みましたが だめ です。見つかりません。ふみをは がっかり
して ねどこの なかに はいりました。

ところが ゆめの なかに ハートの 女王が やって きま

した。

「ふみをさん あなたは わたしが いなく なったので、たい
へん しんぱい して くださいましたね、ありがとう、それで
は なぜ いなく なったか はなしましょうね。」

ふみをは びっくりして 目を まるく しながら、ハートの
女王の かおを 見て、

「どうぞ はなして ください。」
と いました。

「あのね ふみをさん、あなたが いろんな うんの わるい



ことに であつた ことは、これまでに 四十べんも あるでし
よう。そして きようは わたしが いなく なりましたね。こ
れは けつして ふみをさんが わるいのでは ないのです。ほ
んとの ことを いいますと、これは 名なしの いたずら男の
しわざ ですよ。この 名なしの いたずら男は いつも 子ど
もを かたきに して、子どもの いる 家に しのびこんだり
がくこうへ はいりこんだり して、子どもたちの ところの
すきを ねらつて いろんな いたずらを するのです。

ほんとに いけない いたずらもの です。

この あいだ ふみをさんは トランプで あそびました。あ



のとき あなたは いつもの ように、ちゃんと かずを かぞ
えました。けれど あのと き あなたは ちよつと まちがえた
のです。それは もちろん 名なしの いたずら男が そばへ
きて いて、まちがえ させたのです。だから あなたは 一ま
い たらぬい けれど、ちゃんと かずが あつて いると お
もつて トランプを しまいました。

だけど あの とき わたしは とりのこされて しまったの
です。どうか さがしてください、わたしも あなたの ところ
へ かえりたいのです。」

ハートの 女王は かなしそうな かおを しました。ふみを



は、

「わたしもあなたにかえってほしいのです。きつとほかの
ランプのふだもあなたがいないのでさびしがつて
いるでしょう。さあわたしはあなたをつかまえますよ。」
と、いって、ハートの女王の手をつかまえようとすると、
すうっときえてしまいました。

朝になりました。氣にかかるのはゆうべのゆめです。
「ハートの女王はかえりたがつている。どうしてもさが
さなくてはならない。」

ふみをはかおもあらわずにへやのなかをさがしは
じめました。けれどやうぱりありません。

その日はちようど日よう日でしたから、かおをあら
つてごはんをたべてしまつと、またさがしはじめました。
とうとうおひるちかくまでさがしました。

ところがこんなところにあるはずがないとおもつた
本ばこのうしろに、ハートの女王はおちていて、ほこり
てかおがよごれていました。

「あつた、あつた、よかつた。」

ふみをはられしそらにさけびました。



それと いっしよに おもいだされるのは 名なしの いたずら男の こと でした。

「ちえっ！ しやくに さわる やつだ、どうかして こんどつかまえて ぎゆうぎゆうの めに あわして やりたい。あいつは 子どもたちの かたきだ。あいつの ために 子どもたちは うんが わるいなあと、いつも こまって いなければ ならない。」

ふみをは そう かんがえて それから のち、どうかして 名なしの いたずら男を つかまえて、これから けっして 子どもたちに いたずら しませんと、あやまらせるつもり でした。

だが、まだ つかまえる ことが できません。ですから あいかわらず 名なしの いたずら男は、いろんな ことで みなさん を こまらして いると おもいます。

どうか よく 氣を つけて ください。すがたを 見せずに いたずらをする 名なしの いたずら男を！



たれが みがいたか

朝 四年生の たつをさんが くつを みがこうと おもって
げんかんへ いきますと、くつは ちゃんと きれいに みがい
て そろえて ありました。

「おや たれが みがいて くれたのかしら？ ピカピカ ひか
って いる。おかしいなあ。」

たつをさんは ふしぎだと おもいました。

きのうは えんそくて げんば山へ 行きました。ふもとの



草原は 水が ながれこんで いて、

ドロドロ でした。そこを と

おったので、くつは

ずいぶん よごれて

いた はず

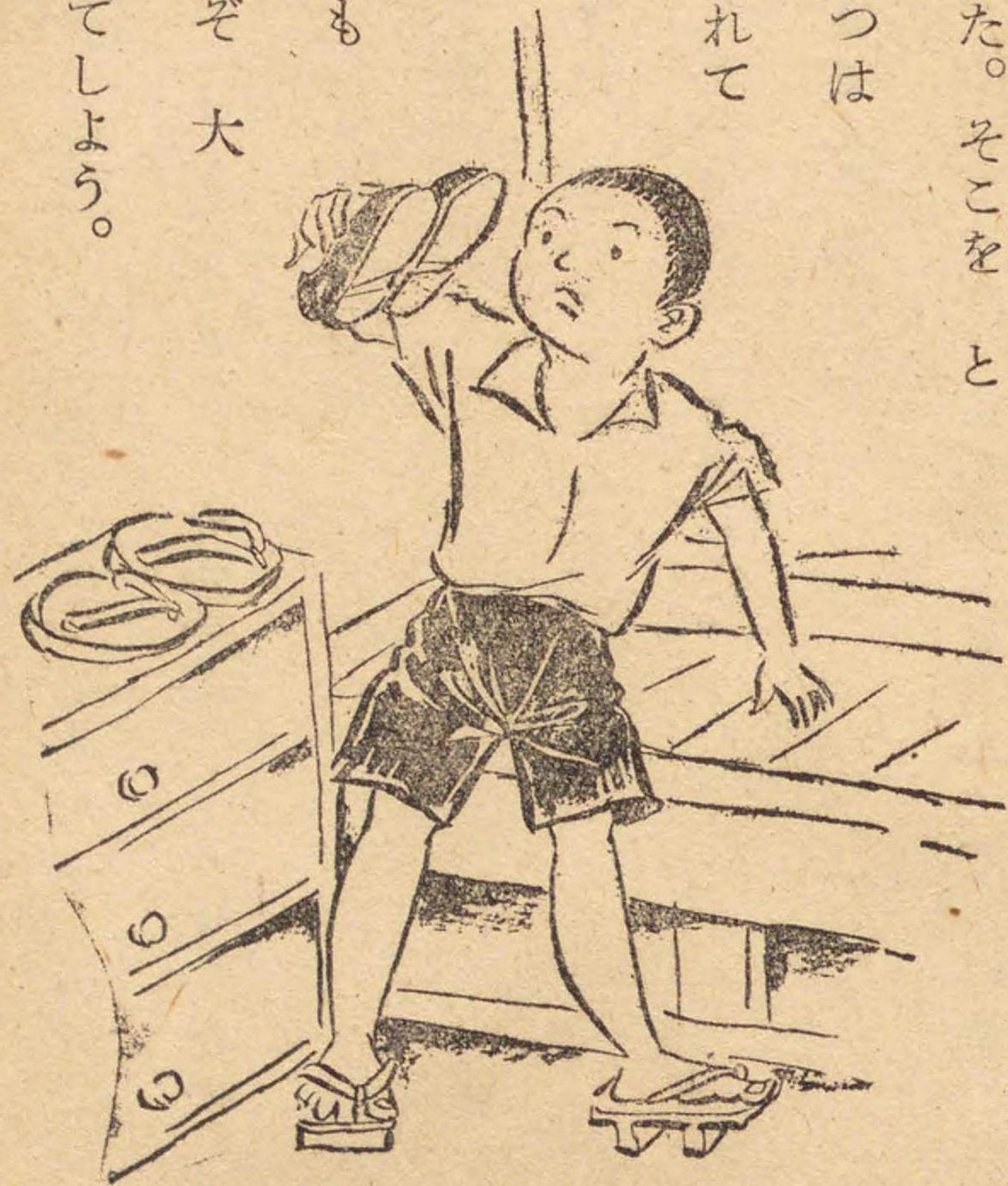
です。たれが

みがいたにしても

みがくのは さぞ 大

へん だった でしょう。

「きつと おかあさんが みがいて





くだすったのだ。きれいにみがいてあるんだから。」

そこで たつをさんは おかあさんの ところへ 行って、

「ぼくの くつ おかあさんが みがいて くだすったのですか？」

と たずねました。

「いいえ、わたしは みがきませんよ。」

おかあさんは あたまを ふりました。

「それじゃ ねえさんかなあ。」

たつをさんは ねえさんが えんがわを ふいて いる ところへ 行って、



「ねえさん ですか？ ぼくの くつ みがいて くだすったのは。」

と たずねますと、ねえさんも、

「わたしは みがきませんよ。」

と いました。

「それじゃ にいさんかな。」

たつをさんは いよいよ おかしいなと おもいながら、にいさんの ところへ いきました。にいさんは ふくを きかえて いました。たつをさんが、

「ぼくの くつ みがいたの にいさん ですか？」



と たずねると、にいさんは、

「ノウ。」

と いました。ノウと いうのは えいごで、いいえとい
う こと です。

たつをさんは いよいよ おかしいなと おもいました。そう
すると おとうさんかしら？ そんなはずは ありません。そ
れでも とにかく おとうさんに たずねて みようと おもっ
て 二かいへ あがって いきました。おとうさんは しょさい
で 本を よんで いらっしやいました。

「あおり、おとうさん。」

「なんだね？」

「おとうさん ぼくの くつ みがいて くださったの です
か？」

「はっはっは、みがかないよ。」

たつをさんは、よかった よかったと、おもいました。おとう
さんが もしも みがいて くださったと したら こまって
しまいます。

たつをさんは 二かい から おりて きて、

「おかしいな、たれが みがいて くれたのだろう。」
と いました。



そのとき ちゃのまの すみで クスクス わらったのは 一年生の ちいさい とみをさん でした。たつをさんは まさか おとうとが みがいて くれたとは おもいません でした か ら、たずねなかったの ですが とみをさんが クスクス わらっている ので、

「ああ わかった、とみをが みがいて くれたのだね。」
と いました。

とみをさんは にこにこ わらいながら、
「うん、にいさんは きのう えんそくで おそく かえったし ぐたびれて みがかなかった でしょう。だから ぼくが みが

いて おいて あげたの。」

と いました。

「ありがとう、ありがとう。とても よく みがいて あるね。
ピカピカ ひかっている。」

たつをさんは おとうとが だまって くつを みがいて おいて くれた きもちを ほんとに うれしく おもいました。

「ようし ぼくも なにか とみをの よろこぶ ことを だま
って して おいて やろう。」

たつをさんは そう きめました。





ちいさい あかい こい

きれいな お池いけが ありました。水は あおく すんで、かが
みの ように ひかって いました。お空そらも 雲くもも お池の ま
わりの 木も 草も そっくり そのまま かげを うつつして
いました。

この お池には こいが たくさん いました。おおきな こ
い、ちいさな こい、くろい こい、あかい こい、あかと し
ろの まだらの こい、そういう さまざまの こいが いつも

たのしそうに おを ふって ゆうゆうと およいで いました。
さて その こいの なかに ちいさい あかい こいが い
ました。この こいは ちいさい けれど、とくべつ はしっこ
くて おまけに なかなか りこう でした。ですから お池へ
あそびに きた 子どもたちが パンの かけら などを なげ
ると、それを たべようと して、たくさん の こいが あつま
っても、おおきな こいを だしぬいて すばやく、よこどり
して しまいました。この ちいさな こいに とって そんな
ことは なんでも ありません でした。

「はっはっは、おおきくても のろまでは しょうが ない。」



この ちいさい あかい こいは よこどり した ぼんの
かけらを、ぱくつと のみこむと さも じまんそうに そう
いいました。

たしかに はしっこく、きびきび して います。子どもたち
も この こいの ことに すぐ きが ついて、

「あいつ すばしっこいね。」

「ちいさい くせに なかなか やるよ。」

と ほめました。

子どもたちは この こいに ピスと いう 名まえを つけ
ました。ピスは ピストルの ピスで ちいさい けれど すば

らしい ちからを もって いる から でした。

子どもたちは お池へ くと、

「ピスは いないか。」

と さがしました。

りこうな ピスは 子どもたちの ことを よく しって い
て、すぐに およいで きます。子どもたちは ピスの すがた
が 見えると、ぼんの かけらを なげます。ほかの こいと
かけらの とりっくらを させて おもしろがるの でした。

ところが、その うちに ピスの すがたが 見えなくなり
ました。



「どうしたの だらう？」

「へんだな。」

子どもたちは ふしぎに おもいました。ピスが いないと おもしろく ありません。

「つまんないな。」

と いいながら、子どもたちは かえって いきました。

ところで ピスは どうしたの でしよう？ それは ピスが ほかの こいから にくまれて、お池の すみの 石の あいだ の せまい ところに しか、いられなく されたの です。

「ここ から でて きては いかん。」

おおきな くろい こいが こわ

い かおを して いました。

「ばかに して いる。」

と ピスは おこって 石の

あいだ から すばやく およ

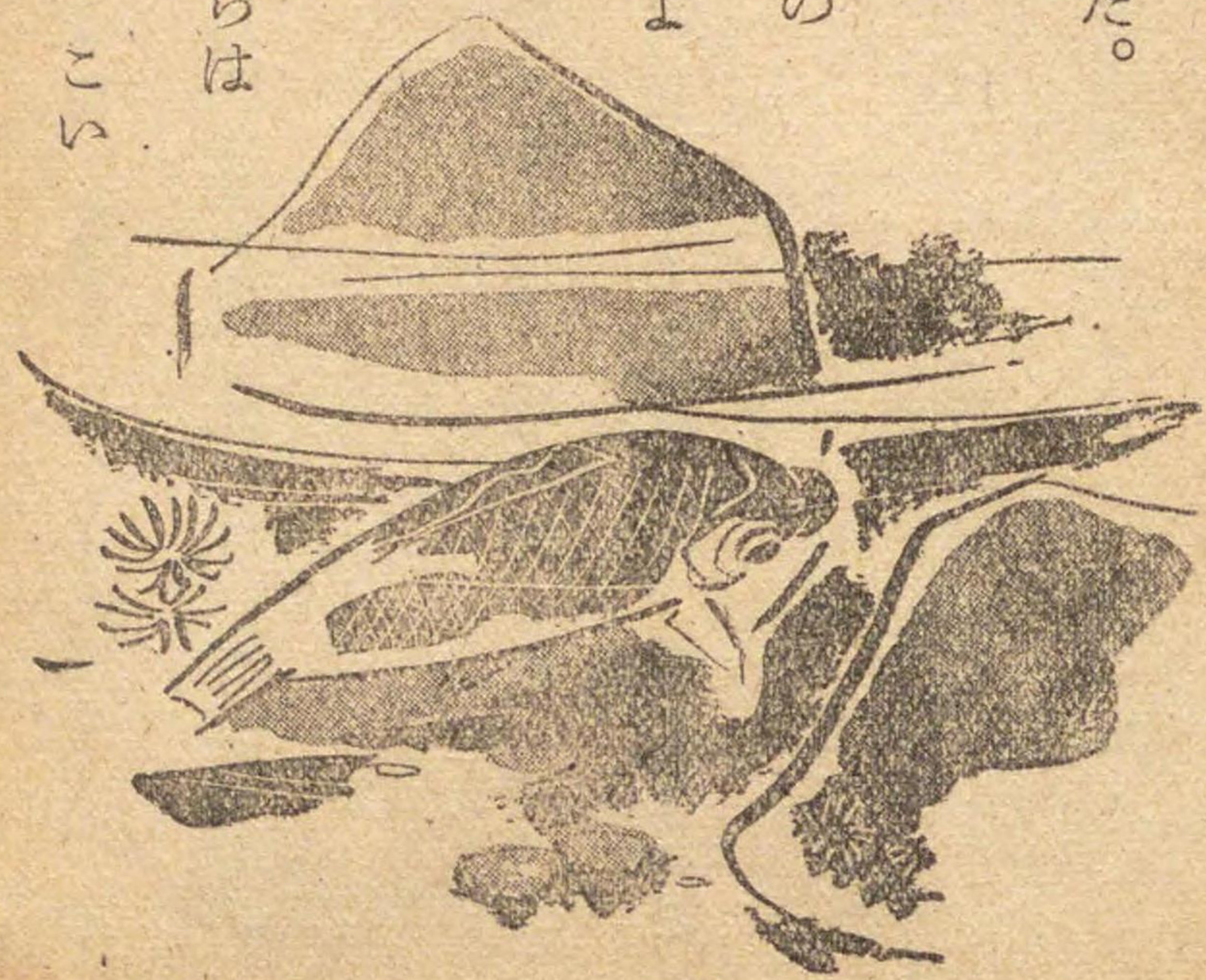
いで しようと すると、た

くさんの こいが じゃまを

して おいこみました。こちらは

一びきで、むこうは お池の こい

ぜんぶ です から、どう しようも





ありません。

ピスは ひろい お池を およぎ まわることも できず、せいまい 石の あいだで、おいしい えさも たべず、つまらない まい日を すごしました。

ピスが 子どもたちの 目につかなく なったのは そう いう わけが ありました。けれど 子どもたちは そんな ことを しりません。

ある日 かえるが きて ピスに はなしかけました。

「どうだね、まい日 つまらなそうだね。」

「うん つまらない。」

「どうだい、みんなに あやまって、もとの ように じゆうに どこでも お池を およげる ように したら いい。」

「あやまるのは いやだ。」

「そんなら こんな お池 から でて しまったらいい。」

ピスは そう いわれると、ほんとに そうだと おもいました。だが、お池 から えられる でしょうか？

「おれに えられるかな？」

「でられるさ。おれ なんか、お池の なかを、およぐ ことも できるし、りくの らえを あるく ことも できる。」

「なるほど、それじゃ おれも でて みようかな。」





「うんでてみるといい。りくはひろいし、いろいろめずらしい。たべものもある。おもしろいこともある。」

かえるは、ぺろりとしたを、だしました。

りこうのようでも、ピスはなんにもじりませんでした。

「ようし。」

とさっそくしっぽにちからをいれて、はねあがりました。一ど、二ど、三ど、三どめに、うまくりくへあがりました。けれど、水のないりくはくるしく、ピスは土つちのうえを、どろまみれになってころがりました。そしてあっぷあっぷとくるしそうでした。



「お池へかえろう。そしてみんなにあやまろう。」

ピスは、そうおもって、もう一どお池へとびこもうとしました。けれど、もうそのときはおそく、ピスのからだからちからがぬけて、お池へとびこむことはできませんでした。



おおきな がまがえる

がっこうのかえりに はたけ道を とおって きますと、道
の まんなかに おおきな ひきがえるが こっちを むいて
のそっと すわって いました。

「やあ すごい かえるだな。」

さきに あるいて いた たみをが びっくりして たちど
まりました。

「どこに どこに？」

と たろうが いそいで きました。

「どんな かえる？」

と こうぞうも いそいで かけよりました。

なるほど おおきな ひきがえる です。手を つき 足を
ふんばって すわり、ぎよろりと 目を ひからし おおきな
口を つきだして います。

「くいつきは しないか しら？」

と たみをが いうと、たろうは わらって、

「くいづく ものか。」

と いました。



「だけど おそろしい どのの いきを はくかも しれないよ。
ほら むかしの ことを かいだ 本に がまがえるが どのの
いきを はいて、人を くるしめる はなしが あった。」
と こうぞうが いいました。

「ほんとか？」

と たろうが たずねますと、こうぞうは、

「ほんとだ。おじいさん、からも きいた。おじいさんの はな
しでは、むかし つよい さむらいが がまがえるの どのの
いきを、かけられて、からだが ぶくぶくに はれあがったそう
だ。」

と いいました。

「ふうん、そう いえば この ひきがえるも なんだか どの
の いきを はきそうだね。そばを とおるのが こわいね。」
みんなは そこに たったまま がまがえるを じっと 見て
いました。

「こわいな、あの 口から どのの いきを はきそうだね。」

「のどを びくびく させてるぞ。」

みんなは いやいよ きみが わるくなり、そこに たちすく
んで しまいました。

すると その とき です。ひきがえるは なんと おもった



のか、とつぜん のそのそと みんなの ほろへ やって きま
した。

「わあっ！」

みんなは、おもわず こえを あげて とびのきました。

「きたぞ、きたぞ、どくの いきを はきかけられるぞ。」

たつをが そう いうと、たろうと こうぞうは あとじさり
しましたが、

「よせ よせ おどかすな。」

と、こうぞうが いいました。

そのとき、うしろで。



「はっはっは。」

と、あかるい わらいごえが しました。みんなは ふりむき
ました。たれかと おもったら それは 六年生の 十吉で あ
りました。

「なんだ おまえたち ひきがえるが こわいのか。」

「だって ひきがえるは どくの いきを はくでしよう。」

「じようだん いうな。どくの いき なんか はく ものか。」

十吉は そう いうと、つかつかと ひきがえるの そば ま
で いき、いきなり みぎ手で ひきがえるを つまみあげまし
た。ひきがえるは 手と足を ばたんと のばして ぶらさげら



れたまま べつに はむかい
も しません。十吉は ひき
がえるの かおを
のぞきこみ、
「ほれ なん
まみだぶつ！」
と いった
とおくへ ぼ
んと なげすてま
した。ひきがえるは



どすんと へんな おとを たてて 地べたに
ころがりました。
「ほう すごいな。」
「えらいな。」
「つよいな。」
みんなは 十吉に すっかり かんしん しました。
けれど 十吉は べつに えらい ことを したと いうような
かおも しません。ただ にここにこ わらった ばかりで、
「ひきがえる なんか なんにも しやしないよ。あんなもの
こわがっちゃ だめだよ。」





と いいすてて、さっさと あるいて いきました。
たみをも たろうも こうぞうも むねが すっと しました。
むねが かるく なった ような 気が しました。もう ひき
がえるなんか こわく なくなりました。
「ひきがえる なんか こわくないぞ。百びき でも、二百びき
でも てて こい！ みんな つまんで すてて やる！」
たみをが そう いったので、たろうも、こうぞうも おかし
がって こえを たてて わらいました。それに しても、えら
いのは 十吉 でした。みんな 十吉の うしろすがたを えら
いなと おもいながら 見おくりました。



おとなりの おじさん

十日 ほど まえ やすたの 家の おとなりへ、わかい お
じさんと おばさんが ひっこして きました。
やすたは 一年生で おひる ちかく がっこう から かえ
りますが、その ころ おとなりの おじさんが おきて、いど
ばたで かおを あらって いる のを、二ども、やすたは 見
ました。

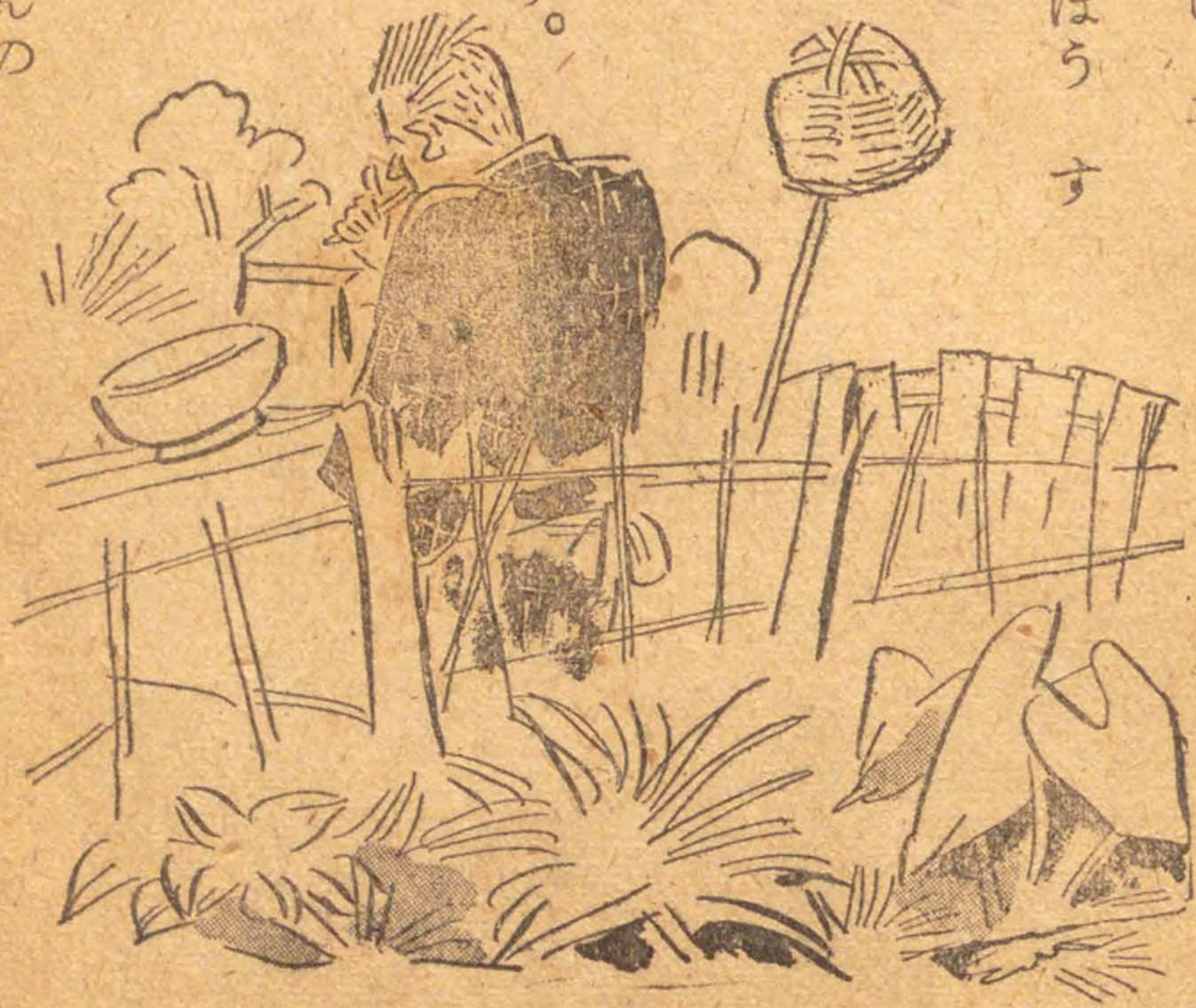
「ねぼらだな。」



と そのときは そうおもった
だけでしたが、きよう がっこう
から かえって くと、また
おとなりの おじさんが、
いどばたで かおを あ
らって いるので、
「なまけものだな。」
と、やすたは おもいました。
なぜなら きよう がっこうで
先生が、



「朝 はやく おきなさい。子ど
もの とき から 朝ねぼろ す
ると、おとなに なっ
て なまけものにな
る。」
と、いった から です。
やすたは 家へ か
えって、
「ただ いま。」
と、いって おかあさんの





ところへ いくと、

「ね おかあさん、おとなりの おじさん いま おきて かおを あらってましたよ。あのおじさん なまけもの ですね。」
と いいました。

おかあさんは、とんでもないと いうように きつい かおを して、

「おとなりの おじさんの ことを わるく 言っては いけません。」

と いいました。

「だって 先生は 朝ねぼう しては いけないと おっしゃっ



たもの。」

「ええ 朝ねぼう しないで はやく おきるのは けっこうです。けれど おとなりの おじさんは とくべつなの。おとなりの おじさんは 朝ねぼう しても いいの。」

やすたは ふしぎに おもって、

「なぜですか？ おじさんは びよう氣 なの？」
と たずねました。

「いいえ、よる ねないで はたらいて いらっしやる から ですよ。」

「えっ？ ねないで？」



「そうです。おかあさんは けさ おとなりの おばさんに うかがつたの ですが、おじさんは 汽車の きかんしてすって。」

「きかんし？ すてきだな。」

汽車の すきな やすたは おもわず おおきな こえて いました。

「ええ だから ひるま から はたらいで よる おそく かって いらした ような ときは どうしても 朝 ねぼう なさる わけ です。ときどき よる ねないで はたらく ことも あります。そう いう とき には、ひるま みんなが はたらく ときに、ねる こと になります。けれど おじさん

は けっして なまけもの では ありません。わかった でしょう。」

「ええ わかりました。」

やすたは うなずきました。

「せけん には よる ねないで はたらいてくださる おじさんたちが たくさん いらっしやいます。たとえば けいさつしよ、しようぼうしよ、びよういん、しんぶんしや、てんもんだい 汽せん、そのほか いくらも あるでしょう。」

「ほんとに そうですね。ぼくたちが ねて いる ときには たらいて いらっしやるのだ。そういう おじさんたちは 朝ね



ぼらを したり ひるま ねたり します。そうだ、ぼく おとなりの おじさんに あやまらなくちゃ。」

やすたは ごはんを たべると、おとなりへ いきました。おじさんは えんがわに こしかけて いました。

「おじさん。」

と やすたは よびました。

「なんだい、あつ おとなりの ぼっちゃんか。」

やすたは おじさんの そばへ いくと、

「おじさんは きかんし ですってね。ぼく おじさんは 朝ね ぼら だから、なまけもの だと おもいました。」

と いて ごめんなさいと、あやまりました。

おじさんは おかshがって わらいました。そして やすたの あたまを なでて、

「これから なかよしに なろうね。」

と いいました。

「ぼく 汽車、だいすき です。汽車の おはなし たくさん して ください。」

「よしよし して あげるよ。」

やすたは おじさん から 汽車の おはなしを たくさん ききました。やすたは このおじさんが だいすきになりました。

お母さんがたへ

ここには、わたしのつくつたお話を集めました。外国のお話のように書かれて
いるお話もありますが、それもわたしのつくつたお話であります。ここに集めた
お話は、すべて幼年童話で、小學校の一、二、三年生あたりを目あてに書いたも
のであります。

食物で身體をそだてるように、子供たちは、お話で心をそだててやる必要があ
ります。お母さんがたが、子供たちの食物に氣をおつけになるように、お話にも
氣をつけていただかねばなりません。

終戦後、出版が自由になりましたため、子供たちのためにも、さまざまの本が出
版されました。けれど、大人への出版にエロやグロのものが幅をきかすとおなじ
ように、純真な子供の心をそこなうような本が、おびただしく出版されました。

これらの本は度ぎつい、おもしろみだけを追うばかりかばかしいおどけ話や、くだら
ない空想をもてあそぶ冒険の話や、科學的というような看板で、怪奇なことをな
らべたてた話や、そういうものをのせています。そして、それらの話が子供たち
のあいだに人氣のあるのは、いかにも困つたことです。どんなに子供たちを害う
かわかりません。

わたしは、自然な、單純な、美しい、明るい童話を書きたく思います。子供の
心をうるほし、そだてるものを書きたく思います。そんな童話では、興味本位の
本と、太刀うちできないとあやぶまれますが、それにはお母さんがたの、御理解
と御助力によるほかはないのであります。どうか愛兒のために、よいお話を選ん
で下さいますよう希います。

著

者



昭和二十三年三月十日印刷
昭和二十三年三月十五日發行

定價四十五圓

著者

水谷まさる

發行者

東京都台東區淺草小島町一ノ二七
齊藤佐次郎

印刷者

東京都文京區關口町一四〇
盛英信

配給元

東京都千代田區神田淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

發行所

東京都台東區淺草小島町一ノ二七
株式會社 金星社
電話淺草(84)二六五九番
振替東京六四六七八番





3

金の星社版